◆どんど焼き

村内各地区で行われる小正月の伝統行事。正月飾り等を御神火で燃やし、その炎で餅をあぶりながら１年間の幸福を祈る。時代の波におされて一時は途絶えたが、若者たちの手によって復活した。

◆十日市の提灯祭り

青年たちの奏でる笛や太鼓の音に合わせ、約７ｍの竹に提灯をぶらさげた子どもたちが練り歩く。五穀豊穣などを願って約百年前から続いている祭りで、毎年７月の日曜日の夜に十日市地区で行われる。

◆キュウリ天王祭り

疫病よけの神様・牛頭天王を祭った八雲神社で７月１４日に開催。夏場の健康を願う村人が、キュウリを２本お供えして１本を持ち帰る。祭り当日は拝殿内で豊年歌(新城甚句)の奉納なども行われる。

◆ふるさと文化伝承館

村内に残る茅葺きの古民家を移築し、内部に農具や民具などを展示している。展示品のすべてが、かつて村民が実際に使っていたもので、知恵と手業を用いて丁寧に暮らしてきた農村文化を学ぶことができる。

【中山義秀記念文学館】

中山義秀の愛したふるさと―。ここには未来に伝えたい思いがある。

ふるさと大信村を愛し続けた作家、中山義秀の存在を村内外の人々に広く知ってもらおうと、平成５年に「中山義秀記念文学館」は開設されました。村役場のそば、きれいに刈りそろえられた芝生の中にあり、瓦屋根が特徴的な美しい建物です。文学館では義秀の生涯と作品についてさまざまな展示コーナーが設けられ、文献研究者、小学生による見学会など来館者は後を絶ちません。こうした記念文学館としての役割に加え、住民がくつろげる広いラウンジ、そして約２万５千冊の蔵書がある図書館の機能を併せ持ち、村の文化の里づくりの拠点ともなっています。また、郷土文化創生事業として「作文コンクール」が毎年行われ、地域の未来を担う子どもたちの文化レベルの向上にも役立っています。

作品や随筆などで、大信村を「心の憩いの場所」「人間の培養土」と書き著した中山義秀は、単に村の生んだ偉人という枠を越えて、村の文化や伝統を築いていく精神の源として現代に脈々と生き続けています。近い将来、村を巣立った子供たちが、中山義秀という存在をきっかけにして、自分の生まれ故郷を誇りをもってアピールする日が近づいてきています。

◆中山義秀記念文学館

ふるさとを代表する中山義秀をより多くの人々に親しんでもらうため、シンボル的施設として誕生。「孤高の文士」「求道の精神」「魂のふるさと」「義秀を知る」という４つのコーナーからなり、図書館も併設されている。